



「雨にぬれ赤みを帯びる班女塚」  
塚の前に立つのは、執筆者の坂本孝志さん

## 第二号 平成28年5月9日 班女塚

「繁昌神社」(京都市下京区高辻通室町西入)の西北にある「班女塚(はんによづか)」は、鎌倉時代に書かれた説話集『宇治拾遺物語』巻第三にその由来が語られている。

「今は昔、長門前司(ながとのぜんじ)といひける人の女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける。妹は、いと若くて宮仕ひぞしけるが、後には家に居たりけり」

妹は建物南側の西の妻戸口(つまとぐち)で寝起きしていた。ときどき通って来る男もあったが、27、8歳のとき未婚のまま俄かに病死する。姉たちが遺体を鳥辺野へ運び、そこで棺を降ろそうとすると、棺は軽くなっており、蓋が少し開き遺体は消えていた。もしやと思い家へ戻ってみると、遺体は妻戸口の元の場所に横たわっていた。翌朝、もう一度棺に納めたが、夕方にはやはり蓋が細めに開いていて、同じことが起きた。「いとあさましくも恐ろし」と思いながらも「ただ、ここにあらんとおぼすか」と、皆が相談して妻戸口一間の板敷きを取り壊し、屍を埋めてその上に塚を築いた。

「班女塚」は少なくとも800年以上前には此の場所にあった。かつて豊臣秀吉が東山佐女牛八幡(さめうしはちまん)の社(現若宮八幡宮社)の側へこの塚を移そうとしたとき、甚だ祟りがあって元へ戻したという話が残っている(『雍州府誌(ようしゅうふし)』巻二)。しかし、そのことを除けば、「班女塚」は応仁・文明の乱や幕末の戦乱、度重なる天災、現代の都市化の波にものまれずに、“元の場所”から一度も動いていない。

班女塚が動かない理由は、永遠の謎である。いつの頃よりか、結婚話のある女性がこの前を通れば、破談になるという言い伝えがある。